

ここまで書いてきてふと思うのだが、
体質的に感情の起伏は激しく、仕事となれば脅しはする、謀略はする、
西郷は、決して世に言う聖人君子、人格者とは思えない。
それが、何故あれほど人を魅きつけて離さないのだろう。

子供の頃、父親からこんな話を聞いたことがある。
「根の善い人間というのは、いくら悪さをしても、
チラチラとその根の善の部分が出してしまうんだ。
逆に悪い奴というのは、どんなに善行をしても
その本性である性悪部分が垣間見えてしまうものなんだよ・・・」

これに当てはめて西郷を考えると、
彼は、志のためには手段を選ばぬ強さを見せるのだが、
裏には本人も持て余した、有り余るような「優しさ」という感情が、
絶えず溢れ出しそうなこぼれ落ちそうな風情が感じられ、
そのアンバランスさの妙が、会う人々を魅了するのではないだろうか。

言葉を変えて補強すれば、

**「何が正しいのかをしっかりと見据えたうえで、自分を無にし、
強い立場の者に対しては厳しく接し、弱者は優しく遇する」
を平然と実践した魅力といえようか。**

口で言うのは簡単だが、これを実践するのは至難の業。

**自分で信ずるところに従い、
力のあるもの、自分よりも上位のものに
厳しく接するためには**

自身の利害得失を超えた“真の勇氣”が必要だし、

**自分よりも弱いものを絶えず優しく遇するには、
謙讓の心があり、
よほどしっかり自分をコントロールできなくては不可能なことなのだから。**

西郷のその辺りを、
維新(目標達成)後の彼の様子を再考することによって、
もう一步突っ込んでみたい。